

協同学習を伴うプロジェクト型 PBL のための環境設定 —相互依存型集団随伴性を活用したチーム運営—

Environment Setting for PBL (Project-Based Learning) with Cooperative Learning
— Application of Interdependent Group-oriented Contingencies Team Management —

乾 明紀

INUI Akinori

京都造形芸術大学*

Kyoto University of Art and Design

Key words: active learning, Project-Based Learning, interdependent group-oriented contingencies

目的

大学がこれまでの「何を教えるか」を中心とした教育から、学生が「できるようになる」ことを重視するパラダイムシフトの中で、学生をアクティブ・ラーナー（積極的学習者）にするプロジェクト型 PBL への期待は大きい。本研究では、協同学習の伴うプロジェクト型 PBL を実践するための環境設定について検討した。

方法

筆者が担当するプロジェクト型の演習科目を受講する学生 9 名で組織された、「アートオークション（芸術作品競売会）」プロジェクトを企画・運営するプロジェクトチームを対象に、4 月から 11 月までのプロジェクト活動中の相互依存型集団随伴性を高めるための環境設定（教育支援としての介入）をおこなった。

主な環境設定は次の 4 つである。1) 楽しいテーマで話し合うワークショップの実施、2) チーム全員による作品収集活動、3) ブログ更新継続のための促し、4) 「週間予定報告シート」、「週間活動結果報告シート」のメンバー間の確認。これらを独立変数として、その効果を測定した。

結果

結果については、1) チームの情報共有のために開設したメーリングリスト（以下 ML）の投稿数は安定的に増加した。2) 作品募集のためのブログ投稿数は、上記の設定をおこなわなかった前年度より改善された。3) ブログ投稿数は、全体を通しては前年度を上回るブログ投稿があったが、作品募集の際に大きく増加した投稿数を維持することはできなかった。4) 夏季休暇中の学生の ML 投稿数は、前期授業期よりも上昇した。出席率は前期授業期よりはやや低下しているが、前年度の夏季休暇中の出席率と比較すると大きく改善されている。また、後期授業期の出席率も前年度より高くなった。

考察

この結果から次のように考察した。チーム結成直後に、楽しいテーマのコミュニケーションという仲間の受容を高める介入が、相互依存型集団随伴性のための確立操作となり、標的行動である ML 投稿を増加させた。また、この過程において、チーム内の社会性や仲間の相互交渉

が促進され、チーム全員による作品収集活動の際には、目標達成に必要なブログ投稿がチームへの協力行動として自発した。その後ブログ投稿については、一部の学生のための投稿となり、依存型集団随伴性の特徴を見せたが、個人随伴性が強化されやすい夏季休暇中に際し、相互依存型集団随伴性を高めるための環境設定として、授業開始直後に 1 週間の活動をメンバーが対面で確認し合う場面を作ったことで、出席率は前年度より改善され、ML 投稿数は増加した。このように夏季休暇中にも関わらず学生はアクティブにプロジェクト活動に参加した。よって、相互依存型集団随伴性によるチーム運営が、プロジェクト型 PBL に必要な協同学習行動を増加させることに効果的であることが明らかになった。

対人援助としてのプロジェクト型 PBL

学生がアクティブ・ラーナーであり続けるための教育的支援としてのプロジェクト型 PBL は、当然のことながら、大学と社会・職業との接続を見据えたものであり、キャリア教育の一環であると言える。ただし、それは就職活動のためという矮小化したものではなく、アクティブ・ラーナーとして自らの「できること」を「キャリア・アップ」し続けることを目指したキャリア教育である。対人援助学の視点では、「キャリア・アップ」とは、他者の存在や行動という環境と自分の行動の相互作用において、「できることが増える」という行動変容を表現したものである（望月，2009）。教育場面においては、「援助つきで『できる』」（＝他立的自律）行動の成立とその選択肢の拡大について、絶えず当事者が関与できるための環境設定が重要である。社会的・職業的自立を目指すキャリア教育のプロセスにおいて、この視点は、非常に重要である。

主な参考文献

望月昭（2009）「対人援助学」キーワード集（所収）
涌井恵・福井雅子・前田典子（2006）協同学習による学習障害児支援プログラムの開発に関する研究 ―学力と社会性と仲間関係の促進の観点から―（課題番号：1470117）文部科学省科学研究費補助金（若手研究(B)）報告書

*筆者所属は、研究時のもの。現在は、立命館大学。